

〈祈りのために〉

「もし他国人があなたがたの国に寄留して共にいるならば、これをしえなければならぬ。あなたがたと共にいる寄留の他国人を、あなたがたと同じ国に生れた者のようにし、あなた自身のようにこれを愛さなければならぬ。あなたがたもかつてエジプトの国で他国人であったからである。わたしはあなたがたの神、主である」  
レビ記 19章 33～34節

1931年9月18日、当時満洲医科大学の学生として学徒動員されていた小川武満牧師は満洲事変の当夜、「『誰か、誰か、誰か』との三度の誰何に答えなかったものは射殺すべし」と命ぜられ、歩哨に立たされた。翌朝、親しかった車曳きの青年が撃ち殺されているのを目の当たりにし、「五族協和」というスローガンが偽りであることを知ったという。

その後、100万戸移住計画のかけ声の下、疲弊した日本の農村から多くの家族が、満洲の地に移住した。日本基督教会でも賀川豊彦が満洲キリスト教開拓団を派遣したことは周知のとおりである。これらの移住者のほとんどは、もともとそこに住んでいた人たちの土地を奪ったり不当に安価で手に入れたりしたために、1945年8月9日のソ連の侵攻後、土地を追われ、逃げ惑う中で、約27万人の開拓団のうち、約8万人が命を落とし、残留婦人、残留孤児となったものも少なくなかった。小川武満牧師が1932年に林三喜雄牧師から洗礼を受けた奉天教会も消滅した。

9月を迎え、私たちはこの悲劇を、教会の罪責とともに胸に刻まなければならないと思う。1951年の日本キリスト教会(新日キ)の創立に大きな役割を果たした牧師の幾人かは、満洲の地で寄留の他国人だったのであり、そうであれば、わたしたちもまた、かつては他国人だったといえるのではないだろうか。

一方で、終戦時、満洲に渡った日本人よりもはるかに多い、200万人にも及ぶ朝鮮人が、様々な理由で来日を余儀なくされており、日本人以上の苦悩を身に

負ったことを同時に覚える必要がある。戦後も種々の理由で帰郷することができず、在日者となった隣人については、なおさらである。

最近、入管施設における外国人に対する劣悪な処遇の一旦が報道されているが、教会は、わたしたち自身になされていることとして、このような悪と戦うことが求められているのではなからうか。

いま、ミャンマーでも、アフガニスタンでも、弱く小さい人々が、圧倒的な武力を持つ政権のもとに、生命の危機にさらされている。国外からの呼びかけも届かず、国際的なつながりを持っていけば、かえって弾圧の理由になってしまう。このような状況を見るにつけ、かつて日本が支配していた朝鮮や台湾や中国、東南アジア諸地域で、同じような、そしてさらにひどい行為が行われていたことに、思いを馳せずにおられない。インドネシア領パプアでは、無抵抗の牧師や長老たちが並ばされ、穴を掘らされ、日本刀で次々と首をはねられていったという証言が残っている。いまだに日本軍の持ち込んだ手榴弾や機関銃が、教会の敷地に埋められているのが確認されてもいる。

戦争罪責を悔い改めた教会がなすべきことは何だろうか。それは、自分自身のように寄留の他国人を愛すること、国に無条件に服従するのではなく「私はあなたがたの神である」と宣言されるお方の声に聞き従うことである。神が、日本人だけの神ではないように、教会も日本人だけの教会でないことを、私たちは証していかなければならない。

〈祈り〉 主よ、わたしが悔い改めの実を結び、隣人たちとともに喜ばしくあなたに仕えていくことができるように、導いてください。 小塩海平(大会靖国神社問題特別委員会委員長 東京告白教会長老)

## 新シリーズ開始『その時に備えて Part 2』を読む（3）

芳賀繁浩（豊島北教会牧師）

### はじめに（第2版）

天皇代替わりと改元が行われました。「平成最後」の連呼から一転して、圧倒的な祝意に日本が覆われた感があります。30年前、昭和天皇の容態が悪いというニュースが流れると、さまざまな行事が「自粛」され、教会でも「クリスマスを祝うのですか」と言われたものです。こうした社会全体を自粛に向かわせる力は、「同調圧力」と言われました。今回の代替わりでも、自粛と祝意の違いはあるものの、天皇の日本社会への影響力の強さと、それに同調する日本社会の特徴は、よく表れたと言えるでしょう。

昭和天皇に比べると、戦争にかかわるような負の側面があまり感じられなかった現上皇、その路線を引き継ぎ、国民に寄り添う姿勢を見せる現天皇の印象は、決して悪いものではありません。それだけに、天皇制について考えることに、戸惑いも多いようです。

このような状況の中で、天皇代替わりについてのキリスト教界の関心は高くないものの、およそ次のような反応があります。ざっくりと分類するとすれば、天皇制は問題だ、政府がやろうとしていることは問題だ、という「批判派」。逆に、天皇を批判すべきではない、日本を悪く言わず、その良さを強調すべきだ、という天皇制「擁護派」。そして、まるで興味がない「無関心派」といったところでしょうか。

これらはまるで違う反応のようですが、実は共通点があります。それは、対話が難しいということです。

たとえば「批判派」がいろいろ問題点を挙げるのは大切ですが、その話は家庭や職場、教会で通じるでしょうか。正義を振りかざしても、独り言に終わってはもったいないでしょう。また、最近では「右翼の劣化」などと言われますが、「擁護派」の天皇制や権力を擁護する発言には、危機感に煽られたような感情的なものも多く見受けられます。雑誌などの受け売りではなく、確かな情報と問題意識に基づかなければ、せっかくの主張にも説得力がありません。そして「無関心派」は文字通り関心がないものですから、対話が難しくなります。

大切なのは、この問題について「考えること」をやめないことです。かつて日本の教会は、天皇制を批判した者も、擁護した者も、無関心だった者も、翻弄され過ちに陥りました。ですから、私たちはこうした時にこそ、関心を持ってこの問題に向き合いたいと願っています。

また、キリスト教界内での天皇制についての考え方もさまざまでしょう。しかし、多様性とは何でもアリということではありません。「イエスが主である」という共通の土台に立って、教会のあり方について共に模索したいと考えています。

そこでこのQ&Aでは、天皇制や天皇代替わりの問題点と、教会の課題について取りあげます。キリスト者として、どう向き合うかを考えるきっかけにいただければと思います。

なお、第2版発行に際し、全面改定は時間を要するため、基本的に本文は修正していません。そのため、「現天皇」などの表記は、明仁天皇（現上皇）を指します。ご了承ください。

《解説》 順序が前後しましたが、日本福音同盟社会委員会編『その時に備えてPart2—天皇代替わり Q&A』（第2版、2019年）を読むにあたって、「まえがき」（第2版）を取りあげることにしました。

日本基督教会靖国神社問題特別委員会編『いまなぜ大嘗祭か』（1989年）とはだいぶ違った印象を持たれたことと思います。

内容的には重なる部分がほとんどですが、その語り口、とりわけ、天皇制や代替わり問題に関心がなかったり、「伝道」のためには「ヤスクニ問題」に取り組むのはマイナスだと考え、天皇制に代表される「日本的」なものを積極的に評価すべきと主張する教会のメ

ンバーに対して、頭ごなしではなくまた上から目線でもなく、丁寧に、敬意をもって、そしてなにより聖書を土台として、「『イエスが主である』という共通の土台に立って、教会のあり方について共に模索したい」というあり方には、学ぶべき多くの事柄があるように思います。

「私たちの信仰から天皇代替わりについて考える」とのサブタイトルが示すとおり、さほど遠くないはずの次の「代替わり」という「その時」に向けて、また、必ず来る前天皇、前皇后の死去という「その時」に向けて、私たちがみ言葉の学びと祈りによって備えるための一助となればと願っています。

## 第3章 15年戦争期における朝鮮の日本基督教会

「15年戦争期における朝鮮の日本基督教会」(その2)

李元重著

日本帝国朝鮮総督府は、15年戦時下に入ると、戦争遂行のため、強力な皇民化政策という同化政策を遂行した。朝鮮の民衆を国民精神総動員に編入させ、「内鮮一体」に集中させ、神社参拝を強要し、「皇国国民の誓詞」を斉唱させ、志願兵令を公布して日本語の常用化を強いた。日本基督教会は、この国民精神が活発化するこの時こそ伝道の好機とした。

### 神社参拝を決議したイエス教長老会第27回総会

1938年6月、富田満日本基督教会大会議長ら一行は、在朝日基中会(以下、日本基督教会を日基教会と略す)の牧師の案内で、朝鮮の日基教会と朝鮮人教会で、講演会と説教をした。富田は神社が宗教でなく国家の儀礼であることを繰り返した。それに対して朝鮮人牧師は、神社参拝は偶像礼拝であると反駁した。1938年9月の朝鮮イエス教長老会第27回総会において、朝鮮総督府は100余名の警察官を会場の平壤西門外教会礼拝堂に陪席させ、神社参拝を決議させた。総会后、全員が平壤神社で神社参拝した。これは韓国教会の恥辱的歴史となった。

### 日本基督教朝鮮教団の設立

1939年3月、日本帝国議会は宗教団体法を成立させ、1941年6月、日本基督教団が創立した。朝鮮総督府は、植民地政策の指導に向けて朝鮮教会に日本基督教団との合同を命じた。

1941年9月20日、日本基督教会朝鮮中会は、「日本基督教団第一部朝鮮中会」として設立したが、部制の廃止によって「日本基督教会朝鮮教区」の名称で合同した。1942年9月6日、日本基督教団となった統理富田満は、京城の朝鮮長老教会の日本・朝鮮合同礼拝で、内鮮一体の「教会合同」というテーマで講演した。その内容は「教会合同の意味は、日本の教会が『英米への依存心から完全に脱却』したこと、これからの課題は日本的キリスト教の樹立で、その根柢になる皇室中心の一家主義である」というものであった。

しかし、朝鮮長老教会は完全な合同をしたのではなかった。朝鮮長老教会の指導部は、日本基督教朝鮮長老教団という奇形な組織を生み出してはいるが、朝鮮教区の規則を異常な方法で修正しただけで、新しい合同教会の創出ではなかった。

日本帝国当局の圧力による日本基督教団への教会合同は、台湾、日中戦争によって半植民地状態となった中国、占領されたインドネシア・フィリピン・香港でも、教会合同が早々に強いられた。

### 神社参拝反対運動

朝鮮の教会は、神社参拝問題という最大の困難に遭遇し、様々な反対運動を展開した。朴寛俊<sup>パク・クアンジュン</sup>長老と安利淑<sup>アン・イスク</sup>は、神社参拝強要反対のために日本に渡り、日足信亮<sup>ひびきのぶすけ</sup>、松山常次郎、宇垣一成元朝鮮総督を訪問して陳情した。1939年3月第74回帝国議会上に傍聴人として会議場に入り、神社参拝強要反対の建議文を投降した。朴と安は逮捕され、朴は1945年3月に獄死した。平壤神学校の学生たちが反対運動を起こしたために、平壤神学校の教授等は逮捕され、学校は無期限休業となった。神社参拝反対運動の象徴的な人物は朱基徹<sup>チュ・キチョル</sup>である。平壤の山亭峴<sup>サンジョンヒョン</sup>教会牧師だった彼は、1938年2月の検挙から1940年8月、第4次検挙まで様々な拷問を受けながら投獄と釈放を繰り返し、1944年4月21日に獄死した。彼は「教会は国家からの独立を保ちつつ、国家に向かって神の言葉を語り続けること。これが教会の本質的責任である」と言って、「一死覚悟<sup>イルサカゴ</sup>」して神の言葉を宣べ伝えた。その他にも書き尽くせない神社参拝強要に対する抵抗と苦難があったが、在朝日基教会はその実情を誰より詳しく認識できる立場にあったにも拘わらず、何も反応しなかった。

大会靖国問題特別委員会委員 川越弘

## <ヤスクニ問題関連ニュース>

### ○「菅首相が戦没者追悼式で言及「積極的平和主義」って？」

菅義偉首相が15日の全国戦没者追悼式の式辞で言及した「積極的平和主義」は、安倍前政権から日米の軍事的一体化や、自衛隊の海外派遣を正当化する根拠として使ってきた。2001年の米中樞同時テロを受け、米国が報復としてアフガニスタンに侵攻後、日本はインド洋上で給油活動を実施したことなどを皮切りに、自衛隊の海外任務をなし崩し的に拡大している。

#### ◆米の「対テロ戦争」を後押し

積極的平和主義は安倍晋三前首相が多用し、首相は前政権の外交・安全保障政策を引き継ぐ。「国家安全保障戦略を貫く基本思想」と位置付けられ、自国が攻撃を受けなくても、武力で同盟国を守る集団的自衛権の行使を容認する閣議決定を行い、安全保障関連法を成立させた。安倍、菅両政権は、安保法の下で「自衛隊がこれまで以上に国際平和に力を尽くす」「一国だけで自国の安全を守ることはできない時代」と主張する。

安保法に基づき自衛隊の任務や活動範囲は次々に広げられた。20年は自衛隊が米軍の艦艇や航空機を守る「武器等防護」を25件実施するなど、日米の軍事的一体化は進んだ。こうした日米の協力を先取りした取り組みが米国による「テロとの戦い」を後押しする自衛隊の海外派遣だ。  
(東京新聞：2021.08.16)

### ○「都知事の追悼文見送りに抗議」

関東大震災時に虐殺された朝鮮人の追悼式典の実行委員会は23日、小池百合子知事が2017年以降、式典に追悼文を送っていないとして抗議声明を発表した。声明では9月1日に開催予定の式典では追悼文を送るよう、強く要請している。

式典は日朝協会などで作る実行委が1974年から開き、歴代知事は追悼文を送ってきた。小池氏は就任1年目は追悼文を寄せたが、それ以降は「全ての犠牲者に哀悼の意を示しており、個別の追悼文は控える」と送付していない。

(毎日新聞：2021.08.23)

### ○「米退役軍人 消えない心の傷 対テロ戦争経た自殺者 戦死の4倍超」

2001年9月の米同時多発テロをきっかけに、アフガニスタンやイラクで米国が始めた対テロ戦争での米兵の戦死者は7千人に上る。しかし、対テロ戦争を経て自殺した米兵は3万人を超えるという推計され、戦死者の4倍以上にもなる。<略>  
道徳的傷の影響 心理学者のシャウナ・スプリンガー氏は「モラルインジャリー(道徳的負傷)」が与える影響の大きさを指摘する。大切な仲間を失った喪失感や、生き残った罪悪感など様々な状況において、兵士たちは心の傷を負うのだという。

爆発装置の一因 リポートをまとめたトーマス・スイト研究員によると「9・11後の戦争では、過去の戦争と比べても自殺率が高く問題は深刻だ」という。理由として、米軍に対する武器として普及したIEDの存在を挙げる。脳への衝撃で後遺症が残った人は、自殺率が高い傾向にある。

また、軍事・医療技術の発達で自殺率を高めている側面もある。爆発を受けても多くの兵士は生還し、負傷した兵士の3分の1は再び派兵されてきた。徴兵制がない米国では、対テロ戦争の長期化により、限られた数の兵士に負担が重なり、自殺リスクを高めることに繋がっている。(朝日新聞：2021.08.24)

800号ヤスクニ通信 2021年9月12日 発行 日本キリスト教会靖国神社問題特別委員会 発行人・編集・発行 小塩海平(東京告白教会)
---

<編集後記> 野戦病院の必要が説かれる時代が来ようとは、誰が想像したであろうか。野戦病院の改革に取り組んだナイチンゲールは「天使とは、美しい花をまき散らす者でなく、苦悩する者のために戦う者である」と語った。再び、命が軽く扱われる時代が到来しつつある。教会の働きを再考したい。K.K.